

存在論的解釈についての対話 — 清水論文（2004）に対するコメントとして

阪本英二 九州大学大学院人間環境学府
Eiji Sakamoto Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

要約

「存在論的問い」は、とりわけ質的心理学において必要とされている。この点で、清水論文「遊びの構造と存在論的解釈」（2004, 質的心理学研究, 3, pp.114-129）がこの方法論を提起しそれを試みたことは、大いに評価すべきである。本論文は、今後心理学においてこの方法論が進められることを見越して、清水論文に対して以下のようなコメントと質問を提出するものである。①清水論文で導入された構造概念の整合性を検討するために、ロムバッハ（Rombach, 1971/1983）の構造概念を補足説明し、質問を提出する。②清水論文において存在論的解釈の意味するところが不明確であり一部誤解があることを指摘し、「遊び」が存在論的に問われているかを検討する。一方で清水自身の素朴な遊び了解に基づいて解釈されている点があることを指摘し、「実存論的分析論」（Heidegger, 1927/1994）という別の問い方の可能性を検討する。③その具体的方法として、遊びそのものが生き生きと生成される可能性のある「現象学的記述」を検討する。④最後に、心理学の領域で存在論的解釈が導入される際に生じうる問題について議論し、今後の展望を素描する。

キーワード

存在論的解釈, 構造, 現象学, 実存論的分析論, 質的心理学

Title

Dialogue on Ontological-Interpretation: Commentary on Shimizu's (2004) Paper.

Abstract

The present article shares the assumption raised by Shimizu (2004, "The Structure of Play and an Ontological Interpretation) that ontological-interpretation is a methodology especially needed in qualitative psychology. The following critical comment and questions, therefore, are raised with the expectation that such a methodology continues to be followed: 1) In order to argue whether his introduction of "structure" was valid ontologically, Rombach's (1971) concept of structure is reexamined. 2) The meaning of "ontological-interpretation" in Shimizu's paper was thought to be unclear and even misunderstood on some points, which casts problems on the validity of "play" as inquired ontologically. Heidegger's (1927) notion of "existential-analysis-of-Dasein" is suggested as an alternative perspective from which to focus on the researcher's own understanding of play experiences, which is implied partially in Shimizu's paper. 3) "Phenomenological-description" as a concrete way of approaching play experiences is discussed. 4) Some problems and prospects that are expected when ontological-interpretation is adopted in psychology are argued.

Key words

ontological-interpretation, structure, phenomenology, existential-analysis-of-Dasein, qualitative psychology

1 執筆の経緯及び本論の目的

清水論文「遊びの構造と存在論的解釈」(2004, 質的心理学研究, 3, pp.114-129)は、その方法論において、従来の心理学への挑戦である。この存在論的問いの提起が『質的心理学研究』に掲載され議論されることになった事実が、すでにこの領域に存在論的な問いが必要とされていることを体現していると思われる。存在論的問いは心理学において事実上開始されたといえてよい。

そもそも筆者がこの清水論文に回答するのは、存在論的解釈という方法が筆者の思索(研究)¹⁾そのものを意味するほど密接なものだからである。筆者は現在、制度的には「人間環境学」あるいは「環境心理学」という領域に所属している。そして目下「〈場所〉とは何か」という問いに取り組んでいる(阪本, 2002, 2004a)が、この〈場所〉への問いも存在論的に問われる必要があったのである²⁾。筆者は、自ら生きる者として生き生きした現象そのものと出会うことから問いが開始されるという鯨岡(1998, 1999)の間主観的アプローチあるいは現象学的アプローチから多大な示唆を受けた。筆者はさらに環境世界を問題にすることから、その延長として、ハイデggerの存在論へと思索の手がかりを見出していった経緯がある。以降の論述に先立って、あらかじめそれをはっきりさせておきたい。

さて、構成されてしまった心理学的概念に規定されていない「前-心理学的」な問いを発することが、とりわけ質的心理学と呼ばれる領域において必要とされていることは、改めて議論するまでもないだろう。大倉(2002a, 2002b)の「アイデンティティとは何か」という問いも、今振り返ればまさしく存在論的問いであった。そのような問いの必要性は、いま清水(2004, p.115)が、従来の心理学における「研究の空回りの現状(中野, 1996)」と「現象理解に向けた問いの立てかたと取り組みかた」の問題性を遊びというテーマにおいて指摘するだけでも、それが遊び研究に限定されない心理学全般にわたる広範で根源的な問題であることが十分理解できるとと思われる。心理学が暗黙のう

ちに採用してしまっている様々な枠組みと諸前提からできる限り解き放たれ、まずは現象そのものへと向かい、現象そのものから手応えをもって丁寧に考えていこうとする「存在論的問い」は、今後も様々なテーマ・領域において行われていくことが求められるであろう。この点で、清水論文が心理学に果たした役割、すなわち「存在論的に問う」という方法論の提起とその試みは、まずは大いに評価すべきである。

しかし、清水論文は「存在論的問い」が一般に誤解される可能性もはらんでいる。結局は従来と同様の研究が、すなわちすでに現象してしまったあとの存在者(もの/こと)を「データ」として扱うような「存在的」な研究が、名前を変えて(ゆえに問題は根深くなるのだが)再生産されるのではないかという危惧を筆者は抱くのである。そこで、今後心理学において存在論的な問いかけが適切に進められることを期待して、清水論文に対してコメントと質問という形式で「修正」あるいは対話を行いたい。このような議論によって、原初的な心理学研究への帰還がさらに促進されることを期待する。

2 構造概念についての疑問

まず本章で、清水論文にとって非常に重要なロムバッハ(Rombach, 1971/1983)の構造概念について補足説明し、この構造概念と清水論文との整合性を検討したい。

清水(2004)は、論文中で次のような構造概念が採用されることを述べている。

「構造とは、それ自体が法則として、己から現れ出てくるような、ひとつの存在論的生起であり、同時にひとつの解釈である。」

(清水, 2004, p.118)

(1) ロムバッハ(Rombach, 1971/1983)の構造概念

1 点目の指摘は、多くの読者が清水の採用する構造

概念を通俗的な「モデル」という意味で受け取ってしまうのではないか、ということである。むしろこれでは清水がねらう存在論的問いにはなりえず、遊び「モデル」の提示を目的とする論文と受け取られてしまう可能性がある。実際、筆者も一読して抱いた違和感はこちらにあった。つまり、「存在論的に問うということは『構造』へと還元することである」かのごとく誤読してしまったのである。そしておそらく依然としてそのように受け取ったままの読者がいるのではないかと思われる。やはり清水が拠り所としているロムバツハの構造存在論を、その骨子だけでも述べるべきだと思われる。

ロムバツハ (Rombach, 1971/1983) の構造概念は、具体的なモデルやシステムといったいわゆる「構造」とは次元を異にするものであり、後者は前者が具象化されたものである。この通俗的な意味での「構造」とは、まず明確に区別されることが必要である(そこで以降、通俗的なモデルとしての構造をカッコ付きで「構造」と表記して区別する)。この区別は、ハイデッガー (Heidegger, 1927/1994) の存在論における「存在論的差異」にほぼ対応している³⁾ (Rombach, 1971/1983, pp.161-162)⁴⁾。これは「ある」そのものと「あるもの／こと」の区別、つまり「存在」と「存在者」の区別である。ただし注意すべきことは、「存在」に対応するこのロムバツハの構造概念が“es gibt” (与えられる) という力動的な「生起」あるいは「発現」という意味で理解されなければならないことである⁵⁾。

誤解を恐れずにこの構造概念を具体的に言い換えれば、次のように述べることができよう。窓の外に見える景色はそのつど見え方が変わるような混沌としたものではなく、むしろいつも通りのまとまりをもった景色として秩序付けられ現象してくる。あるいは小学校の休み時間に運動場の各所で繰り広げられる様々な遊びは、それらがいったい遊びとしてどのような点で共通しているのかも知らないままに、どれも「遊び」という在りようをもって現象してくる。この例において、景色や遊びといった存在者のその存在(在りよう)は決して無秩序ではなく、秩序づけられて現象してくる(発現する)と言ってよい。ロムバツハの構造概念は、このように、世界が規定づけられて与えられてくるこ

と (es gibt) そのものを指していると考えてよいだろう。

ここで重要な確認は2点ある。第1に、ロムバツハは「ある」(存在)あるいは「与えられる」(es gibt)をいわゆるモデルのような「構造」に還元しているわけではない。ゆえにロムバツハにおいては、「構造=存在論」という一見矛盾した名前が可能なのである。矛盾というのは、構造は通常の意味においては存在者であり、決して存在そのものではないからである。第2に、ロムバツハ自身が認めているように「構造存在論は、ある意味でハイデッガーの仕事の別の基盤において継続するものとみなすこともできる」(ibid., p.10) ことである。よってハイデッガーが開いた存在論的問いにも立ち戻ることが必要になるろう。

(2) ピアジェとミラーを議論する存在論的必然性への疑問

2点目の指摘は、清水は「Piaget (1945/1988) と Millar (1968/1980) の遊び論を母体として改良を加え、枠組み自体を再構成している」(清水, 2004, p.123) としているが、その議論がロムバツハのこのような存在論的生起としての構造を目掛けて問うているのかどうか明確でないことである。例えばピアジェが「構造主義」ということで引き合いに出されているが、ピアジェが、「現象の法則性を解釈する枠組み」(ibid., p.119) として、すなわち「ひとつの方法論」(ibid., p.119) として構造概念を解釈しているならば、ピアジェの論がロムバツハの構造存在論と共に論じられることが可能であろうかという疑問が残る。これに関してロムバツハ自身次のように述べている。

「存在論に関する素朴さこそ、世に行われている構造主義が非難されるべき第一の事柄なのである。[中略] この[システムと構造の]区別がわかる者には、システムと構造が異なった存在論的根本形式であること、より正確に言えば、システムが本来は存在論的根本形式ではなくて、存在論的根本形式の存在的転化(活用)であることもわかるであろう。構造主義が特定の対象から自らを理解するならば、構造主義はシステムの派生的段階に固着することになる」

(Rombach, 1971/1983, pp.8-9, 大カッコ内筆者加筆)

「包越的な解釈の証しは、包越された解釈の持っている立場にどのような前提の下で到達しうるのかを示せるということである。」(ibid., p.8)

ピアジェ (Piaget, 1968/1970) の構造概念は、確かに「発生」や「構成」を問題にしているが、それらそのものを構造とは捉えておらず、いわゆる「構造」、すなわち存在者として扱っていると思われる。もしロムバツハとピアジェやミラーの構造概念の間に構造論的差異(構造と「構造」の違い)があるとすれば、ピアジェやミラーの遊び論や遊びの「構造」を議論する存在論的な必然性はどこにあるのだろうか。同じ「構造」という語を用いながら、これらの間では問いの次元で捻れている可能性はないだろうか。確かに、ピアジェを議論する理由や意義は清水論文中で明確に述べられてはいる(清水, 2004, p.119)。しかしそれは遊びを「モデル」として鍛え上げていくための存在論的な意義でしかないのではないだろうか。

構造概念の扱いに対するこのような疑問は、そのまま「存在論的解釈」について清水がどのように理解しているか、あるいは清水論文中で遊びが存在論的に問われているのかという疑問につながる。

3 存在論的解釈についての疑問

本章では、まず、清水論文においては存在論的解釈の意味するところが不明確であり一部誤解があることを指摘し、次に、遊びが存在論的に問われているかどうかを検討しこれに関して質問を提出する。さらに、清水自身の素朴な遊び了解に基づいて解釈されている点があることを指摘し、実存論的分析論という別の問い方の可能性を検討・提案したい。

(1) 存在論的解釈に関する清水の論述

清水論文では、「存在論的解釈」という言葉が意味する内容が明示されているとは言えない。しかし、以下のようにそれに関する記述は散見される。

「遊びとはいったい何であるのか」(p.115)

『『遊びとは何か』その内実が問われるならば、一』(p.115)

「遊びに関する日常的な態度を突破する、内実の把握」(p.115)

「遊びを根本から解明するための問い自体が、長らく扱われてこなかった」(p.115)

「このように(原因や動因を問うても)存在を外側から根拠づけたところで、『遊びそのもの』が何であるかは依然として不明であろう」(p.116, 丸カッコ内筆者補足)

「問われるべきは『遊びとは何か』、『そこに何が在るのか』である。遊びそれ自体の意味理解が課題なのである」(p.116)

「遊びを設定する構造そのものを解明することが求められている」(p.117)

「そうした意味で、対象の意味解釈を可能にする『構造』の概念が要請される」(p.118)

以上の記述より、次のようにまとめることができよう。すなわち、清水(2004)によれば遊びの存在論的解釈とは、

- ①遊びの存在を内側から根拠づけるものである。
- ②遊びの内実の把握である。
- ③その内実の把握とは遊びそれ自体の意味理解のことである。
- ④それを可能にするのは、対象の構造理解である。

言うまでもなく存在論的問いとは概念を再定義することではない。清水論文においてもそれは区別されていると考えてよいが、「内実の把握」という言葉は十分でないだけでなく誤解を招くと思われる。この言葉と関連するのだろうが、以上の引用の中で1点だけ明らかに誤解があると思われるのは、清水(ibid.)が「そこに何が在るのか」という問いで存在論的問いを規定している点である。この問いは、存在してしまっ

た存在者についてその属性を問うような「存在論的問い」であり（通常の研究はすべてこれに該当する）、存在するという事実そのもの、すなわち存在様態に踏み止まってそれそのものを問題にする「存在論的問い」とは明確に区別されなければならないのである。

（２）「存在論的」という言葉の理解への疑問

さて、清水が手がかりとするのはロムバッハ（Rombach, 1971/1983）の構造存在論であるが、そこで「[採るべき]方法は現象学の方法以外ありえない」（ibid., p.7）のであり、「存在論の意味するものが自覚されていないところでは、『構造』を存在論的概念として把握できようがない」（ibid., pp.8-9）とロムバッハは述べている。先にも触れたとおり、構造存在論はハイデッガーの系譜にあるのだが、それに鑑みると清水の理解する「存在論的」の意味について疑問が出てくる。またこの疑問は、清水論文がピアジェらの理論における「構造」に直接議論を向けており遊び現象に立ち還っていないのではないかという疑問につながる。

ハイデッガー（Heidegger, 1927/1994）は、存在論的に問うことにおいて、すでに構成されてしまった概念から出発しその圏域の中で解釈されてはならないと念をおす。以下の引用において、「存在者」を「遊び」に、「存在」を「遊びの存在」に読み替えれば、本論の議論に即して理解されるであろう。

「存在者に即してそこから存在を浮き彫りにし、そして存在そのものを解明することが、存在論の課題である。ところが、存在論の方法というものは、歴史的に伝承されてきた様々な存在論などの試みを参考にしようとするかぎり、最高度に疑わしいものでしかないのである。われわれがこの考究を表示するために用いている存在論という用語は、形式的に広い意味で用いているのであるから、その方法を存在論の歴史をたどって明らかにしようという行き方は、当然、われわれの方針に反するわけである。」

（Heidegger, 1927/1994, p.50）

またロムバッハ（Rombach, 1971/1983）も構造を内側から捉えられるものとし、おのれ自身が「世界」に

参与し経験することの必要性を述べている。

「構造は外からは見えない。なぜなら構造の内的相関はそれらの相互の関係においてしか捉えられないからである。これらの相関をいくらかでも開眼させようとするれば、見る者自身が構造の内部で機能を有し、構造のうちで立場を取らねばならない。さもなければ見る者は相関を『経験』するに至らない。ということは、経験をやるもの自身が実質存在論的に己れの経験する現実の一部でなければならない、ということである。ものの世界の彼岸にある『純粹精神』はいかなる『経験』も持ちえない。経験をもつためには純粹精神は——例えば『身体』を通じて——『世界』に機能的に参与していることが必要である。『身体』とは、経験されるべき構造への機能的帰属性である。それゆえ経験は常に現実の内アスペクトである。」

（Rombach, 1971/1983, p.143）

存在論的に問うとは、現に存在し生きられているという事実そのものを、そこから解意することでしかありえず、それは自ずと現象学になる⁶⁾。すなわち、現象がそれ自体から明らかになるように導くことが求められるのである。遊びを存在論的に解釈するためには、「遊んでいる」あるいは「遊びがある」（と了解している）とまずもって体験／経験される事実に即して問わねばならないのであり、単に遊び論を問直すことでは達成されないのである。清水自身が遊びそのものをその現場から改めて問うたのならば、それはそれで非常に興味深いのであるが、いま清水論文にそこまで求めるのは欲張りかもしれない。しかしそれは、膨大なボリュームを必要とするからであり、決して清水論文の性格が事例的ではなく理論的だからという問題ではない。逆説的であるが、存在論的問いにとって、理論的であればなおさら遊びそのものの現象を扱うことが求められるのである。

ところで筆者は、清水（2004）においても、清水自身の経験によって遊びが問われつつあるのを見て取っている。それについては後述することにして、まずは清水論文でピアジェ（Piaget, 1945/1988）やミラー（Miller, 1968/1980）の遊び論が主要なテーマとして論じられたことについていくつか指摘したい。

誤解を避けるために述べておきたいのは、筆者は、

存在論的に問うことは常に具体的な事例に即すことでなければならないと考えているわけではないということである。諸理論との対話という主題は存在論的な問いにとって何ら不当なものではない。ただしこの場合にも次の点は重要である。すなわち、例えばピアジェの遊び論において、彼が具体的に遊びを研究したその現場（プロセス）に立ち還って、ピアジェが思索した遊びそのものから（むろん同時に立ち会うことはできないが）清水が改めて遊びの構造を問うたのかという点である。もちろんそれは、「その遊びの生成」というロムバッハの意味する構造においてである。ピアジェやミラーの遊びの構造を清水がどのように辿ったのかは明確でなく、筆者にはこの点に疑問が残る。ただし清水が全く遊びの構造に立ち還っていないとは言いきれない。ピアジェやミラーの遊びの構造を構造論的に解体・再構築しているふしもあるからである。事実、それらの研究においてピアジェやミラーにはどのように遊びが立ち現れてきているのか、それはどのような存在論的規定に基づいているのかについて触れている箇所もある。例えば、「それは『主体－客体』の二元論的世界観から到来していると考えられるが」（清水，2004，p.120）という記述がそれである。しかしそれでも、ピアジェやミラーのモデルとしての「構造」から出発し、モデルの再構成に帰着している感が強いことは否めないと思われる。これは清水から見て誤読であろうか。

（3）素朴な遊び了解と実存論的分析論

清水（2004）はピアジェ（Piaget, 1945/1988）とミラー（Miller, 1968/1980）を「改良」することで新たな遊びの構造を導いているが、そのプロセスには清水の素朴な遊び了解が含まれ、それに基づいて解釈されている。例えば、「ルールを破り、ルールから逸脱することにも楽しさがあり、……それは経験と相反すると言わざるをえない」（清水，2004，p.120）という記述や、「要するに、結果に新奇性が伴わなければ、それは退屈に感じられ、もはや遊びにはならないであろうという指摘であり、極めて妥当といえるだろう」（*ibid.*, p.122）という記述には、遊びに「楽しさ」などが前提されている。しかし、このような素朴な遊び

了解が存在することは必然である。そうでなければ、遊び研究などそもそも開始されるはずもないからである。そのこと自体を批判しているのではなく、その素朴な了解が十分に明るみに出されることが存在論的問いにとってまずもって必要なことであると指摘したいのである。なぜなら、この素朴な遊び了解そのものを「突破する」（*ibid.*, p.115）ことが、清水論文で目指されている存在論的解釈だからである。素朴な遊び了解をそのまま根拠として持ち出すことは、存在論的解釈にとって重大なトートロジーである。諸理論との対話やその再構成は、ある存在論的解釈をさしあたり達成した上でこそ可能なのではあるまいか。つまり、現象に基づいた自らの解釈を地平にして初めて、諸理論も改めて存在論的に解釈されうと思われるのである。

ところが、この素朴な遊び了解は、解決すべき論述上の不備という消極的な意味ではなく、存在論的問いにとっては積極的な手がかりとなると考えられる。そこで論じたいのが、ハイデッガー（Heidegger, 1927/1994）が「存在への問い」において試みた実存論的分析論である。ハイデッガーは存在論的に問うことを次のように述べている。

「もろもろの学問は、現存在の存在様態である。現存在はこれらにおいて、必ずしも現存在自身たるを要しない存在者とも交渉している。しかるに、現存在には本質上、『何らかの世界のうちに存在する』ということが属している。したがって、現存在に本属している存在了解は、同根源的に、『世界』というようなものの了解と、世界の内部で接しうる存在者の存在についての了解とも及んでいるのである。してみれば、現存在的でない存在性格をそなえている存在者を主題にしているもろもろの存在論は、前＝存在論的存在了解という性格を内包している現存在自身の存在的構造のうちに、その基礎をもち、かつそれによって動機づけられているのである。

このようにして、そこから他のあらゆる存在論がはじめて発現することのできる基礎存在論（Fundamentalontologie）は、現存在の実存論的分析論（*existenziale Analytik des Daseins*）のうちに求められなくてはならないことになる。」

（Heidegger, 1927/1994, p.50）

以上の引用で「現存在自身たるを要しない存在者」あるいは「現存在的でない存在性格をそなえている存在者」を「遊び」と読み替え、いま遊びの存在論的解釈に即して解釈すれば、次のことを意味している。つまり、現存在である人間は（たとえ研究者と呼ばれる人間であっても）日常の世界においてすでに事実的に「遊び」というものを了解しそれに対処しているのであり⁷⁾、逆に言えばそのような現存在の存在に「遊び」の意味を開示する手がかりがあるのである。さらに、その現存在は「おのれが生きている」ということにかかわりながら生きている、すなわち実存するものであり、よって遊びの存在論もこの現存在の実存性の分析（生きられ方の分析）を通して行われうるのである。このようにして、例えばハイデッガー（ibid., 1927/1994）が現存在の根本構成としての「世界一内一存在」を導いたことは周知の通りである。実体的なものを手がかりにできない存在論的問いにとって、現存在の実存性（おのれが生きている在りよう）から問われることが極めて重要であると言ってよい。この問い方をハイデッガーが名づけるように実存論的分析論と呼ぶことにして、今後議論を続ける⁸⁾。

（4）アンリオ（Henriot, 1969/1974）再考

このような実存論的分析論は清水（2004, pp.116-117）が「意識還元主義」として退けているアンリオ（Henriot, 1969/1974）の問い方に近い⁹⁾。そこでアンリオを再考してみたい。

アンリオの問い方はなかなかユニークである。「遊び」を規定できそうな仮説を提示し、それについて検討を進めては、最終的に失敗に終わる。例えば遊びを理解しようとして様々な遊びの形式を検討し分類を試みるが、分類されたところで「すべてがやはり遊び」だという事実在即せば何の解決をしたことにもならず、このアプローチが見込み薄であることに行き着く、といった具合である。このようにして形式、「構造」¹⁰⁾、意味、態度という点から遊びが規定できないかどうかを検討され、あるいは遊びの記述を試み、すべてがなんらかの問題をはらんでいることが露呈されるのである。アンリオにおいてはこのような問いが幾度となく繰り返されるため、読み手はそのつど期待させられて

はそのたびに裏切られるといったように論と付き合いかねばならない。述べられていることはそれこそ問いの途上の言葉なのであり、完成した理論的主張ではないので、読み方には注意が必要である。そして最終的にはアンリオも実存論的分析論と同様の関心へと帰着していると思われる（といってもアンリオにとってはこれも確定的ではないが）。

「最後に問題はめぐりめぐって、遊びをおこなう遊び手にたどりつかないわけにはいかない。[中略]遊びの心理学は、現象学的分析の軸にそって方向付けられた場合、まずはじめに遊ぶという動詞の主語として定義されるべき存在の、態度の記述、というよりもっと深い意味合いでその精神構造の記述へ到達する。」

(Henriot, 1969/1974, p.137)

確かにアンリオは「精神」や「意識」などの概念を無防備かつ安易に用いている。しかしそれは、遊びを「それは遊ぶ主体の意識である」としているのでも、主観的体験に還元しているわけでもない。

清水（2004, p.117）が引用しているアンリオの「遊ぶということの観念なしに、遊ぶ意志なしで、自分が遊んでいるということを知らずに遊ぶことはできない」（Henriot, 1969/1974）という論述の真意は、遊びはそれが「遊び」として現象してくる（了解されている）という事実から問うよりほかないということである。繰り返すが、そのような事実に基づいてこそ遊びへの問いも開始され、解釈も可能であり、素朴な遊び了解も可能なのである。アンリオは、その素朴な「遊び了解」という事実から丹念に遊びの存在論的解釈を試みようとする現象学者であると解するほうが妥当であると思われる。この点からすると、清水の関心（遊びの構造の解明）に即しても、ピアジェ（Piaget, 1945/1988）にも増して一層深い示唆があると思われるのだが、いかがであろうか。

（5）清水論文に見られる実存論的分析論の示唆

先にも少し触れたが、清水論文（2004）には以下のような点ですでに実存論的分析論の方向性が示唆されていると思われる。すなわち、清水が導入した「内

態」という概念 (pp.121-122), また「観察者の生の実感を否定することが、心理学の出発点ではない。

[中略] 遊びを読み取る人間の実感こそを擁護する基盤を整備せねばならず、それは長期関与とはまた別の問題として考える必要がある」という記述 (p.125), 「何度も料理を作り続ける男性」について観察者自身が「自ずとこれは遊びだ」と思うというエピソード的な記述 (p.125) が、それである。

このうち、エピソードについて清水 (ibid., pp.125-126) は、その論文の 4 節, 5 節の論考を通して導かれた「構造の含まれかた」で説明しようとする。しかし、このような方略では、清水が論文前半で批判した「境界設定主義」が「遊びに特徴的と考えられる要素で遊びを確定しようとする」方略と「構造」的に差異がなく、「まったく無理がないわけではないかもしれない」(p.126) と断っているとおり、せつかくの存在論的解釈の試みを自ら矮小化してしまっているのではないだろうか。むしろこのときに「彼が非常に楽しそうに振る舞っているとしか思われぬ」(p.125) という「観察者の生の実感」や「自ずと遊びだ」と思われてくる事実について、それがおのれにどのように与えられ、どのような意味をもってそこに現象するのかを、観察者のその場の生きられ方を通じて生き生きと解釈することで、遊びの構造の生起を描き出すことができるのではないだろうか。その「楽しそう」こそがおそらく、遊びが生起していることそのものであろうから、である。

ロムバッハ (Rombach, 1971/1983) もこれに関して次のように述べている。

「構造は、そのうちで見ているものにしか明瞭にならない。いくら何でも構造に同調しなければならぬ。いつでも個別規定が継起する中で、決してそれ自体で直接には現われぬそれらの規定の首尾一貫性として把握されうのみである。ただちらりと見るだけでは何もわからない。構造は生き生きと見る、創造的に見る、生を共有しつつ見ることが要求するのであり、このような見方はそれ自体、全体構造の生における機能であり、行為である。」

(Rombach, 1971/1983, p.143)

4 代替案の提起—— まずは遊びを現象学的に記述すること

遊びの現象的記述、すなわち心理学でしばしば「データ」とされる行動記述や事実記録をしたところで、遊びそのものを掴みこなうのは必至である。それは遊びという存在様態(内)に現象する様々な存在者の記述に過ぎないからである。皮肉なことに厳密に記録しようとするほど、その記録から生き生きとした遊びの様態(構造)は消え失せるのである。この通俗的な方法の問題性は清水 (2004, p.117) も述べるところである。それでは遊びの在りようは全く記述できないのであろうか。

そこで提起したいのは「現象学的記述」である。本章では、遊びを現象学的に記述することによって遊びそのものが生き生きと生成される可能性に言及し、清水 (ibid.) とは別のアプローチで存在論的解釈を行う方法を提案する。

(1) 現象学的記述とは何か

現象学的記述については、例えば鯨岡 (1998, 1999) の「エピソード記述」がそのよい具体例であり示唆に富むと思われる¹¹⁾。ここではそれを踏まえながらも、存在そのものへ向かうことを特に留意して議論を深めてみたい。

遊び体験と記述は同時には行えず、記述は必然的に反省的である。しかしそうだとすると、研究者が現象にどのように臨んでいるのかは記述に大きく影響する。少なくとも、遊びの出来事を目の前に対象化し主体がそれに対峙しているようでは、それは最初から淡々とした記録作業に終わることが予定されていると云ってよい。あるいは、積極的に遊びに参加して、見よう、聞こう、感じようといった姿勢も、現象学的記述にとっては不適切なものになる可能性がある。なぜならこの時、確かにいくらか「遊んでいるおのれ」がいるだろうが、一方で学問的関心を強くもつ「研究する冷静なおのれ」がいるのであり、その記述は遊びを外から記述したものになる可能性が高い。ここで両者に共通するのは、『私が』いかに対象を見るか」という認識

構造であり、これによって現象はすでに学門的な様相を帯びて現象してることが避けられないのである。これについては清水(2004)が外態として示したことにつながるだろう。

遊びの存在そのものを内態として体験するには、現象に没頭し「私」という自覚が消え、むしろ世界の方におのれが出かけているようであればならない。清水(ibid.)の「状況としての遊びへと、動詞の記述をプロセス自身の内部へ戻すこと」(p.122)という記述もこれと同じことを意味していると考えられる。このように述べると実に困難なことに思えるが、つまりは「ただ遊ぶ」、「徹底して遊ぶ」というあり方が求められるということである。ただしこれは、ただ状況に身を任せ世界におのれを委ねてぼんやり時間を過ごすことではない。むしろ「徹底して遊ぶ」時には、あらゆる体験が生き生きと鋭敏に生きられているのである。この時、そこに現象するものは「私」見るのでも聞くのでも感じるのでもなく、むしろ世界の方から見えてくるのであり、聞こえてくるのであり、感じられてくると言ってよいだろう。以上は、内態という点から清水(ibid., p.121-122)においても触れられたことである。

さて、いま議論すべきはこの現象(体験)を実際に記述することについてである。存在者の記述ではなく存在(在りよう)の記述を目指す際に重要なことは、現象を生き生きと再現することである。これは現象自身の方からその在りようが生成してくるよう、その在りようを言葉の中へと連れてくる作業と言えるかもしれない。これも一見困難な作業に思われるが、われわれは日常的にこれに近いことを行っているのではないか。例えば、面白かった出来事を他人に伝えたいと思った時、体験をイメージしながら無我夢中になって語り、その面白さが生き生きと語られてくることがある。「何て言うか……、何て言うか……」と途中で何度も差し挟みながら、それでも言葉を見つけて「あの感じ」を表現しようとし、それがうまく言葉になって語られた時、語り手自身だけでなく聞き手にも共鳴するようにして共に「面白い」気分が再現される。パロールとエクリチュールのあいだには確かに議論すべき差異があるが、それでも現象学的記述にはこのような日常的な語りの体験に通じる面があると思われる。現

象(体験)を生き生きとイメージしそれを言葉へもたらすことは、特別な手続きを要する作業ではなく、むしろ朴訥に言葉を探すことである。このように言葉にされてはじめて、その言葉に現象の意味が満たされ(充実)、「あの感じ」といった掴みどころのなかった存在に「家」¹²⁾が与えられるのである。

よって、現象学的記述は単に状況の描写でも事実説明でもない。一般に科学的記述は、現象がまず眼前にあって、それを客観的・一義的に写し取るという「記録」の性格をもつものであり、ここで言葉は意味を媒介する記号と見なされる。しかし、現象学的記述においては、言葉は詩的な生成力をもつものとして捉えられるべきである。つまり言葉の字義的な意味によって説明的に構築していくのではなく、むしろ言葉のイメージや広がりによって存在を生成させるのである。

確かに生き生きとした記述は容易ではない。清水(2004)が「名人芸の手腕を発揮することでもない限り」(p.125)と述べているように、それを試みた者なら誰でも「あの感じ」と言葉のあいだに引き裂かれる深淵に悩まされるものである。「発語」は「断念しつつ言い述べる」ことであるとハイデッガー(Heidegger, 1947/1997)は述べるが、その意味の1つは、現象の在りようを言葉は完全に語り尽くすことはできないという意味であろう。それでも、格闘の末に発せられた言葉によってはじめて現象(体験)は開示され生成されるのであるから、記述は避けられない。しかしこの深淵は、存在論的にも構造論的にも決して欠陥ではなく、むしろそこに言葉の可能性を見出した。すなわち、科学的概念のように一義的な意味に現象が閉じ込められてしまわないことにこそ、存在も構造も、それ自体が生き生きと与えられる可能性が生まれると考えられないだろうか。

以上の議論を遊びの記述ということに対応させれば、もし遊びの場全体がおのれに生きられるものであったならば、遊びを了解している力動性はおそらくその現象学的記述にそのままもたらされていくであろう、ということである。そして、その遊びの在りようとその場でおのれの生きられ方(実存性)は、互いに映し合う(鯨岡, 1998)ようにして記述に現われてくるはずである。よって、生き生きした遊びの記述が成功すれば、遊びの存在の思索は、その記述そのものにおい

て半ば成功しているとも考えられるのではないだろうか。このように考えれば、清水論文においては否定的であった「個別的な遊びの記述」も、それが現象学的記述として目指される限りは、「遊び一般の共通理解を推し進める方法論とは異なる」（清水、2004、p.118）どころか、その「個別的遊び」にも一般的な構造が生きうると考えられるのではないだろうか。これはやまだ（1987、2002）のいう「半具象モデル」の発想にも重なるであろうし¹³⁾、ロムバッハ（Rombach、1971/1983）も「普遍的個別記述」という概念でこれを表現していると思われる。さらにロムバッハ（ibid.）は次のようにも述べている。

「個別的なものは全体で『ある』のではないが、それらのうちには『全体』が生きている。」

（Rombach、1971/1983、p.84）

存在と言葉のあいだに深淵があることからすれば、存在論的解釈は決して完成するに至らないことははじめから予定されており、存在論的に問う者は逆説的に常に「不完全」な者である。しかし常に問い続けて現象そのものと格闘するところに、存在論的に問う意味があるとも言える。清水論文（2004）の「まとめと今後の展開」にある「後の展開は外に開かれている」（p.126）という論述には、存在論的にも重要な意味があると思われるのである。

（2）読者の問題

記述はその読解においても注意が必要である。記述は解釈する読者にも委ねられている。重要なことは、現象学的記述に対して読者もその在りようを生き生きと再生しながら読まねばならないことである。記述と同様に、言葉の字義的な意味や一般的な意味に照らしながら読むのではなく、イメージを豊かに広げその言葉が開く世界を目がけて読むべきである。この読み方もやはり特別なものではなく、むしろ日常的な読み方に近い。われわれは小説などを読む際に、言葉によって立ち現われる情景の中に没頭する。読んでいるのは記述というよりむしろその情景の在りようと言ってもよいだろう。そして小説を言語分析的に読むのが明ら

かに筋違いなように、現象学的記述とその読解のあいだに齟齬をきたすことがあれば、その記述から生き生きとした生成力は容易に失われてしまう。言うまでもなく、結論を一瞥して検討を加えるような読み方は意味がない。遊びが生起しているひとつの現場にあたかも読者がそれぞれ居合わせるようにして、共にそこで遊び、共に思索することが必要なものであり、在りようを生成させるのは記述と読解の共同作業なのである。

（3）芸術との親和性

ところで、以上の議論を踏まえると、存在そのものへ向かう現象学的記述は、学問の世界から離れむしろ芸術の領域に接近しているように思われる。事実ハイデッガーやメルロ・ポンティも、存在そのものへと思索を進めるなかで様々な詩人や画家に関心を向けていった。芸術作品においては存在者よりもむしろその存在が描かれようとされたからである。実際、現象学的記述も詩作に近い面があると思われる。例えば、詩人黒田三郎の『詩の作り方』（黒田、1993）には、現象の記述という学問的関心にとっても有益な示唆が散りばめられている。

遊びそのものの解明を目指すことにとって、果たして学問的なアプローチのみでそれが可能なのか、議論の余地があると筆者は考えている。ハイデッガーが、プラトン以来の形而上学の歴史は「存在忘却」の歴史であると捉えるように、従来の学問的パラダイムそれ自体において、すでに存在へ向かう道が閉ざされているかもしれない。むしろ、存在そのものを表現する可能性の高い芸術的なアプローチ、あるいは例示（デモンストレーション）や実践そのものが、思索の方法や表現の方法として模索されてもよいのではないかと思われる。

しかし、いまそこまで議論を飛躍することはやめ、「質的心理学」という場所で議論を続けるとすれば、現象の記述からその解釈へとステップを進めることが求められるであろう。

（4）記述から解釈へ

遊びの存在をあえて学問的関心の下に置くならば、

そこには解釈という作業が必要になってくる。記述が存在を純粋に追及するためであるとすれば、解釈とは、その記述の意味を他者へと開いて理解を促すために、あるいは瞬間的で一回的な出来事を時間-空間的に拡張し、対話を可能にするために必要なものであると考えられる。

ここでいう解釈とは、記述に映し出されるおのれの実存性を解釈する現象学的反省である。そのプロセスは、鯨岡(1998, 1999)の発達研究においては「メタ観察」という手法であり、大倉(2002a, 2002b)の「アイデンティティへの問い」においては「語り合い(法)」であり、阪本(2002, 2004a)の「〈場所〉への問い」においては「脱自的思索」ということができるだろう。これらはいずれも現象との密接性を失うことなく、現象自体に映し出されるおのれの実存性を、つまり素朴な了解を抱えてその場で生きている在りようを解釈している。清水論文にとってこのプロセスは、遊び現象の構造をロムバッハのような生成される様態として明るみに出す(顕在化する)ということになるのかもしれない。

実存論的分析論という方法はもちろん現象学的な解釈であるが、そこでは、現象の意味内容の解釈(それは何であるか)に直接向かうのではなく、現象がおのれにそのように現われてくる事実の意味解釈(それはおのれにとっていかに在るか)に特に留意し、それを經由して現象の意味内容を解釈する方法ということができる。前者は即存在者についての解釈であるが、後者は存在の解釈に至る可能性を持っているのである。

先ほど、記述における現象と実存性の映し合いに触れたが、解釈主体もまた生きる者であるから、当然解釈にも解釈主体の実存性が映し出される。すなわち、現象が解釈されるということは、その意味内容の解釈と共に解釈主体自身の存在も解釈されることになる。よって、解釈主体が誰であるか(私は何者か)ということ重要な問題である。この意味で、一個の実存において解釈が行われることには確かに限界がある。しかし一方で、「あなただからこそ、私だからこそ、その現象を解釈できる」という積極的な意味も考えられるのである。

ところで現象学的反省のプロセスは、フッサール(Husserl, 1913/1979-1984)の現象学的還元という認

識手続きが基本に据えられていると考えてよい。しかし、存在論的解釈にとっては、いくつかの点で現象学的還元の意味に変更が迫られる。これを指摘することで、この存在論的解釈の内実をより明らかにしていきたい。

フッサール(ibid.)の現象学的還元は、「厳密な学」を目指そうとするフッサール現象学においては根幹をなすものといってよい。自然的態度において捉えられるものは、「素朴」であり「生のもの」であるという研究者の意識にもかかわらず、それは既存の知識や理論に枠づけられ浮かび上がってくる可能性がある(鯨岡, 1999)。このように常識や学知によって構成されている意識を自覚していこうというのが現象学的還元という方法である。この方法的態度は確かに重要ではあるが、いまや質的心理学研究においては議論するまでもない基本的態度であろう。しかしいま存在論的解釈にとっては、この態度においては共通しながらも、意識現象の構成を問題にするフッサールの現象学的還元とは解釈の方向性が大きく異なるように思われる。フッサール流に意識現象の構成を解釈すると、例えば具体的には次のようになる。

私は遊んでいる。その意味は？ 気分が高揚して楽しい。その意味は？ 最近論文を書き終えて久しぶりに羽目を外しているのだ。その意味は？ 最近論文を書くのは好きじゃないと思い始めている。その意味は？ 云々……(つづく)

つまり、「遊んでいる」という体験には様々な意識的背景があり、そこから意味が多重的に構成されて、現在の「遊んでいる」という総合的な意識が解釈されるのである。この解釈は、遊んでいるいまこの現象(体験)から一步身を退き別の場所(地平)に立ち、現象を冷静に眺めなおしその背景を理解し、その意味を解釈するものである。確かに、現象の背景を解釈することは、それによって現象の意味がより際立って理解されるので、他者に記述を開く上では重要である。しかし、背景はあくまでも現象の背景なのであって、それは存在論的解釈が迫ろうとする現象の在りようそのものに迫ることではない。

単に現象の背後にある事情や状況を解釈したところで、遊びの在りようには決して向かうことがない。むしろこの解釈の方向は、遊びそのものという中心点か

ら離れていく。在りようを解釈するという存在論的解釈は、このように意識を逆行するようなフッサール流の現象学的還元を繰り返すことでは達成されないのである。

存在論的解釈は、現象から一步退くのではなく、むしろ一步前に入る（臨む）という方向性をもつと考える。つまり、面白さ、迫力、あるいは悲しみや苦しみに、冷静な視座からではなく、むしろそれを生きる真っ只中で解釈するのである。これは、例えば「自らの今後の人生の問題」といった自らの生にとって直接問題とされるような実存的課題に対する問い方に等しい（阪本，2004b）。そこではまさにおのれが悩み考えるのであり、まずはおのれ自身に真に納得されるような解釈が目指される¹⁴⁾。このような解釈は、冷静な視座における意味解釈ではなく、解釈自体が生き生きと行われているのである。

存在論的解釈は、問いが世界の方から与えられ、存在に適切に応答することが目指されて思索されるものである。この点で、主観的で恣意的な解釈とは区別されるが、実際のところその区別を明確につけることは非常に難しい。これは、今後も存在論的解釈の実践を通して議論されていく必要がある。またこの問題を克服するために、対話がより重要な意味をもつと思われる。

5 心理学に存在論的解釈が持ち込まれることについて

最後に、心理学の領域に一見「哲学」的な問題が持ち込まれることについて触れておきたい。確かに、現象をより一層理解したいという関心に即せば、心理学と哲学の境界設定はほとんど意味のないことである。しかし存在論的解釈という前・学問的な問いかけを行うことは、従来の心理学や通俗的な意味での科学の圏域では不可能であると思われる。なぜならこの圏域は伝統的な諸前提によって性格付けられており、存在論的解釈はそれを還元しそこから開放されることによって初めて可能だからである。

しかし清水（2004，p.117）は次のように述べており、その圏域を脱していないように思われる。

「実際に Henriot（1973/1974）も触れているとおり、心理学的な解決には至らないだろう¹⁵⁾。共通理解を重視する科学的態度において、このアプローチは採用できないのである。」

（清水，2004，p.117）

あるいは、伝統的な心理学や科学からの「観察者の恣意」といった形式的批判に対して清水（ibid.）は、「構造の含まれかた」（pp.125-126）によって説明しているように、それらの圏域で構造を扱い対応する結果、自らその存在論的解釈の試みを矮小化してしまっていると思われる。そのような形式的批判は概して存在論的に無根拠であり、慣習的なものである。「観察者とは何（誰）か」あるいは「データとは何か」についての存在論的規定に基づいて批判されている可能性は、残念ながら小さいと言わなければならない。清水（ibid.）の試みがこのような圏域に閉じこめられてしまうのは、非常に残念である。また、存在論的に問うことが従来の圏域で開始されてしまえば、取り返しのつかないことになる。

本論4章で筆者は記述への読者の接し方について指摘したが、存在論的解釈という問い方が心理学という領域に新たな可能性をもたらすとすれば、心理学の学問領域自体も改めてその意味が問われなければならないであろう。

当然、以上の批判はいわゆる「存在論」と呼ばれる論考にも向けられる。ここでも重要なのは、「存在論」ではなく、思索（研究）そのものである。ゆえに本論のような議論自体が解消されてゆけばゆくほど、それこそが存在論的問いの真意なのである。すなわち、実践的な日常世界（現場）において生きられている問題（問い）がその現場で直接向き合われて問われることが、より本質的な問いとして求められるのである。

『構造存在論』に従事するのではなく、具体的な構造分析を行わなければならない。構造分析論は〔具体的なものを〕を究明することによって、〔自ら〕明らかなものとなる。」

（Rombach，1971/1983，p.263）

注

- 1) 筆者は、通常の存在的な問題を扱ういわゆる「学問」的な「研究」と区別して、自らの生(実存)において存在そのものを目にかけて問うことを「思索」と呼んでいる。したがって「思索」は哲学的思弁などを意味しない。また心理学においても「思索」は可能ではなくである。これについては、本論4章で示唆される。
- 2) なおこの一部は第14回日本発達心理学会(2003)のラウンドテーブル、「私の経験」を記述するとはいかなることか——『拡散』(大倉, 2002b)を軸にして)において話題提供として発表された。
- 3) ただしロムバッチにおいてはこの存在論的差異から存在論的同一性へと飛躍するとされる。
- 4) 本論では、引用頁は全て日本語訳書のものである。
- 5) この「存在」は、いわゆる後期ハイデッガーのそれである。
- 6) 現象学には様々な理解があり混乱もあるが、(狭義の)主観的なものを扱う方法という誤解がまだに流通していることには愕然とする。ここでいう現象学とは、何らかの立場でも他の具体的な方法と相対的に選択されるような方法でもない。「形式的には……存在者をそれがおのずから現われてくるとおりに挙示するいかなる態度も、現象学と称する権利をもっている」(Heidegger, 1927/1994, p.93)と言ってよいのだが、そこでは大きな認識論的転換が求められ、実際それほど簡単なことではない。心理学における現象学の可能性と問題性については、例えば鯨岡(1999)に詳細な議論がある。また、心理学においてはいわゆる「厳密な学」の方法という意味合いの強いフッサール現象学が受け容れられてきたが、いま存在論的解釈を試みるわれわれにとって手がかりになるのは、むしろハイデッガーの現象学(存在論)である。フッサールとハイデッガーの間には、現象学について大きな認識の隔りがある。
- 7) これは清水論文の冒頭においても指摘されていることである。「我々が『遊び』というコトバを日常的に使う際に不自由を感じず、コミュニケーションに齟齬をきたさない理解が共有されている」(p.115)
- 8) なお阪本(2004a)においても、存在論的に問うことが自ずと実存論的分析論になることについて論じているので、参照されたい。
- 9) 清水が相当に参考にしていただいていると思われる西村(1989)はアンリオに批判的であるが、西村においては「実存」という概念を実存主義におけるそれ(現実存在, *existentia*)に解していると思われるが、

アンリオ(Henriot, 1969/1974)のそれはハイデッガーが現存在の根本形式(構造)として理解した「脱自」(*Existenz*)を意味していると考えられ、アンリオを十分に汲み取っていないと思われることを付け加えておきたい。

- 10) この時アンリオは存在者としての「構造」を検討しているため、カッコ付きの表記とした。
- 11) 鯨岡(1999, pp.152-166)にエピソード記述の諸問題と満たすべき要件が詳述されている。
- 12) 「言葉は、存在の家である」とハイデッガー(Heidegger, 1947/1997)は述べる。
- 13) ただし現象学的記述にとってモデルとは、記述そのものであり、そこから何かを抽出したものと考えるべきではない。
- 14) 他者が存在論的解釈においてどのような意味をもつかは、議論すべき重要な問題であるが、ここでは指摘するに留めておく。
- 15) この部分は清水の誤読だと思われる。アンリオ(Henriot, 1969/1974)がここで意味するのは伝統的な行動科学としての心理学であり、その意味で「遊びの『心理学』は不可能であると認めなければならぬ」(Henriot, 1969/1974, p.81)と述べているのである。清水はこのような意味で「心理学」を受け取っているとは思われなし、その意味ではむしろアンリオと清水の関心は近いと思われる。

引用文献

- Heidegger, M. (1994). 存在と時間(上・下)(細谷貞雄, 訳). 東京: 筑摩書房(ちくま学芸文庫).
(Heidegger, M. (1927). *Sein und Zeit*. Halle a.d. S.: Niemeyer.)
- Heidegger, M. (1997). 「ヒューマニズム」について: パリのジャン・ボーフレに宛てた書簡(渡邊二郎, 訳). 東京: 筑摩書房(ちくま学芸文庫). (Heidegger, M. (1947). *Über den „Humanismus“*, *Brief an Jean Beaufret*, Paris. Bern: Verlag A. Francke AG.)
- Henriot, J. (1974). 遊び: 遊ぶ主体の現象学へ(佐藤信夫, 訳). 東京: 白水社. (Henriot, J. (1969). *Le jeu*. Paris: Presses Universitaires de France.)
- Husserl, E. (1979-1984). 純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想(イデー) I-1・I-2(渡邊二郎, 訳). 東京: みすず書房. (Husserl, E. (1913). *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*. Erstes Buch. Halle: Niemeyer.)
- 鯨岡 峻. (1998). 両義性の発達心理学: 養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション. 京都: ミ

ネルヴァ書房。

- 鯨岡 峻. (1999). 関係発達論の構築：間主観的アプローチによる. 京都：ミネルヴァ書房.
- 黒田三郎. (1993). 詩の作り方 (二訂版). 東京：明治書院.
- Millar, S. (1980). 遊びの心理学：子供の遊びと発達 (森重敏・森林, 訳). 東京：家政教育社. (Millar, S. (1968). *The psychology of play*. Baltimore : Penguin Books.)
- 中野 茂. (1996). 遊び研究の潮流：遊びの行動主義から遊び心へ. 高橋たまき・中沢和子・森上史朗 (編), 遊びの発達学：基礎編 (pp. 21-60). 東京：培風館.
- 西村清和. (1989). 遊びの現象学. 東京：勁草書房.
- 大倉得史. (2002a). ある対照的な2人の青年の独特なありようについて. 質的心理学研究, 1, 88-106.
- 大倉得史. (2002b). 拡散 diffusion：アイデンティティをめぐり、僕たちは今. 京都：ミネルヴァ書房.
- Piaget, J. (1988). 遊びの心理学 (大伴茂, 訳). 名古屋：黎明書房. (Piaget, J. (1945). *La formation du symbole chez l'enfant : imitation, jeu et reve image et representation*. Neuchatel : Delachaux & Niestle.)
- Piaget, J. (1970). 構造主義 (滝沢武久・佐々木明, 訳). 東京：白水社 (文庫クセジュ). (Piaget, J.(1968). *Le structuralisme*. Paris : Presses Universitaires de France.)
- Rombach, H. (1983). 存在論の根本問題：構造存在論 (中岡成文, 訳). 京都：晃洋書房. (Rombach, H. (1971). *Strukturontologie: Eine Phänomenologie der Freiheit*. München: Verlag Karl Alber GmbH Freiburg.)
- 阪本英二. (2002). 場所の存在論的解釈：「私の場所」としての箱崎商店街きんしゃい通りを手がかりに. 九州大学大学院人間環境学府修士論文 (非公刊).
- 阪本英二. (2004a). 〈土地〉との出会い：〈場所〉の存在論的解釈. 九州大学心理学研究, 5, 133-143.
- 阪本英二. (2004b) 生きるという方法：心理学にとっての現象学. 日本心理学会第68回大会発表論文集, 23.
- 清水 武. (2004). 遊びの構造と存在論的解釈. 質的心理学研究, 3, 114-129.
- やまだようこ. (1987). ことばの前のことば. 東京：新曜社.
- やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス：「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.

投げかけて頂いたことに筆者は勇気づけられました。そして査読者の方からは、本論を修正するにあたり、有益なご指摘を頂きました。また本論は、九州大学大学院人間環境心理学研究室 (南研究室) のみなさんとの議論を通して形作られていきました。ここにみなさまへここから感謝の意を表します。ありがとうございました。

(2004.6.1 受稿, 2005.5.31 受理)

謝 辞

何よりもまず、清水氏に「存在論的問い」を心理学に